

資 料

開業助産師によるソーシャル・キャピタル醸成の一事例

——子育て中の母親が集う・学ぶ・稼ぐ拠点作り——

浅 見 恵梨子

A Case Study of the Development of the Social Capital Induced by an Independent Midwife: Foundation of Meeting, Study and Business of Mothers

ASAMI Eriko

抄録：

目的：開業助産師と育児期の母親たちが共同で設立・運営している C ハウスの設立から現在までの活動の実際を明らかにし、活動から生み出されているものをソーシャル・キャピタルの視点で考察する。

方法：事例研究。C ハウスの設立・運営者である A 助産師と B に対し、個別に半構造化面接を実施した。面接記録、C ハウスが公表している活動内容を信頼、互酬性、ネットワークの視点から分析した。

結果：C ハウスでは共感・互助の関係から互酬性あるネットワークへ発展し、助産所が関わることによって社会的信頼が生まれていた。

結論：C ハウスの活動からソーシャル・キャピタルが生まれていると結論づけられた。母親の互助の状況から橋渡し型ソーシャル・キャピタルに分類された。本事例は開業助産師がソーシャル・キャピタル醸成に関わられた一例と認められた。

キーワード：ソーシャル・キャピタル，開業助産師，子育て支援，ネットワーク，助産経営

1. はじめに

高齢出産の増加，コミュニティから孤立した母親や児童虐待の問題等，母子を取巻く環境には多様な問題が提議されている。母親がいいきと安心して子育てしていくためにどのような取り組みができるのか。地域社会の問題解決の新たなキー概念として注目されているのがソーシャル・キャピタル（Social Capital）である。ソーシャル・キャピタルは様々な定義づけがなされているが（Putnam, 1993；OECD, 2001；稲

葉, 2016），主たる構成要素は，信頼，互酬性，ネットワークと認識されている。

母子保健法が改正され，2017 年 4 月から全国の市町村に子育て世代包括支援センターを設置することが努力義務化された。これによって，妊娠中から育児期にわたる切れ目ない支援体制が構築されつつある。そして 2019 年 12 月から産後ケア事業が努力義務化された。子育て世代包括支援センターや産後ケア事業にはソーシャル・キャピタルとしての役割が期待されている（横山，2021；福島，2020）。このように行政施策が推進される中，助産師は妊娠期から

子育て期のソーシャル・キャピタル醸成にどのように関わっていけるのであろうか。杉山他(2018)が病院内の産後ケアセンターを対象に行った調査では、助産師にとってソーシャル・キャピタルの醸成は難しいと報告されている。しかし、助産師活動をソーシャル・キャピタルという分析視座で捉えた研究自体が少なく、助産師がこの分野に貢献できる可能性に関して議論はほとんどされていない。齋藤(2008)はソーシャル・キャピタル論の有効性を検証するためには、質的調査による実証研究の積み重ねが必要だと述べている。

今回、開業助産師が古民家を借り上げて妊婦から子育て中の母親が集える場を創り、そこに集う母親たちがネットワークを広げてお互い様の精神で助け合い、さらには起業する者まで現れるという稀有な発展をみせているCハウスの事例を取り上げる。この事例について設立から現在までの活動の実際を明らかにし、活動から生み出されているものをソーシャル・キャピタルの視点で考察する。本稿の知見が、助産師が効果的に妊娠期から育児期の母親の支援環境づくりを考える際の基礎的資料となることを意図した。

2. 研究目的

Cハウスの設立から現在までの経営活動の実際を明らかにし、活動から生み出されているものをソーシャル・キャピタルの視点で考察する。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

本稿は現行の助産経営の実態を記述するケーススタディである。瞠目すべき助産活動を展開している事例の実態を明らかにすることに主眼を置くため事例研究とした。対象事例はA助産所のA助産師(50歳代)が設立・運営するCハウスである。

2) 用語の定義

ソーシャル・キャピタル：カワチ他(2013)の定義を援用し、その組織に属する者が組織成員間で信頼感や結束力・連帯感を感じ、それら

を基盤とした助け合い等とする。またソーシャル・キャピタルが醸成されている状態とは、その組織に属する者が組織成員間で信頼感や結束力・連帯感を感じ、それらを基盤とした助け合い等が生まれている状態とする。

Cハウスの活動：運営者(経営者)側から捉えたCハウスの経営実践の総体とする。

3) 調査方法

事例内での現象把握の妥当性、信頼性を担保するため「厚い記述(Thick Description)」(Geertz, 1973)になるよう、インタビュー対象者は運営者側から複数選定し、より正確に多角的に事例を把握できるようにした。

①調査対象者

運営者であるA助産師とB(40歳代。A助産所出産者)。研究者が直接A助産師に研究依頼し、BはA助産師から紹介を受けた。

②調査内容与方法

調査期間は2021年6~8月である。データ収集はインタビュー法を用いた。A助産師はA助産所内で対面、Bはオンライン(Zoom)で個別に半構造化インタビューを行った。所要時間は一回約90分で、A助産師は2回、Bは1回行った。インタビュー内容は設立経緯、運営状況、Cハウスの活動が生み出しているもの、助産師と母親との関係性である。厚い記述になるよう具体的な出来事・行動が起こった状況や文脈、時間的経過と合わせてインタビューした。同じ事象についてA助産師とBで認識が違えば、後日事実確認を行い正確な状況把握に努めた。インタビュー内容は調査対象者の許可を得て録音、Zoomによる録画を行った。またCハウスが刊行するパンフレット、ホームページやFacebookで公表している情報を可能な限り収集しドキュメント資料とした。

4) Cハウスの活動の分析視点

ソーシャル・キャピタルの構成要素である信頼、互酬性、ネットワークとした。

5) 分析方法

データベースはインタビュー中の研究者のメモ、逐語録、ドキュメント資料である。設立のきっかけとなった出来事や開設時の状況、現在に至るまでのCハウスの経営理念と経営方略、活動の実際と母親がどのように参画したか、運営者が捉えた母親の意識や行動の変化を中心に

要約し、それがどういう事象を表すかを解釈した。研究者の解釈が妥当か A 助産師に確認し、事実認識の厳密性を図った。

そして C ハウスの活動の成果や母親の意識や行動の変化を信頼、互酬性、ネットワークの観点から、ソーシャル・キャピタル醸成について分析した。

6) 倫理的配慮

研究協力は任意であり、インタビュー途中や終了後に拒否できること、拒否しても不利益が被らないことを調査依頼文に明記し、同意書への署名をもって研究参加への同意を得た。研究内容を閲覧する権利の保障、データは匿名化して厳重管理し、目的外使用をしないことを説明した。結果の公表について承諾を得た。本研究は、甲南女子大学研究倫理委員会の承認（承認番号 2020033）を得て行った。

4. 結 果

C ハウスの設立から現在までの経営活動の実際を述べる。調査対象者の語りの部分は太字で示す。

4-1. C ハウスの設立経緯

A 助産師は自身が出産後に育児サークルで救われた体験を持つ。そのため育児中の母親の居場所や仲間づくりの必要性を強く感じ、開業後に助産所で料理教室、公民館を借りてヨガ教室等を開催し、病院出産者も参加できるようにした。B は A 助産所出産者で、教室に集う参加者をまとめて育児サークルを立上げた。参加者は次第に増え A 助産師が広い場所を探していた時、古民家の所有者がテナントを募集していることを知る。A 助産師は育児サークル活動を通して信頼していた女性 3 名（2 名は A 助産所出産者、うち 1 名は B）に共同で借りないかと持ちかけた。応募には複数の申し込みがあったため企画内容が審査されることになり、B が C ハウスの構想を企画書にまとめた。結果、企画の公益性や健全性が評価されて採用され、建物の改修を経て C ハウスが開設された。B が育児期の多忙な身でありながら、C ハウス設立・運営に大きく関与しようと思った動機は以下の B の語りから示される。

B：開業助産師さんとの出会いで人生が変わった。お産前に助産師さんの言うように運動を頑張って身体づくりをした。30 時間近くかかって大変だったが、自分はやるべきことをやったんだからと自分の身体を信じた。助産師さんは自分を信じて待ってくれた。自分を信じて待ってくれる人というのはそれまでの人生の中で実感としていなかった。やるべきことをやって信じて待てば生まれてくる。これほど自分が高められる体験はない。自己肯定感。産んでみて、あっこれは日本中の人が体験すべきだと思った。（中略）A 先生と出会って自分軸ができた。私がここ（C ハウス）をやっているのは、自分が経験した出産体験を経験する女性を増やしていくこと。A 助産所で産む人を増やしたい。

B は A 助産師に出会う前に第 1 子の自宅出産で人生観が変わる体験をし、その体験でエンパワメントされたと述べている。そして周りの女性にこの体験を拡げていくべきだとの使命感を持ち、A 助産師との出会いをきっかけに、C ハウスを発信拠点としてライフワークとして取り組んでいることがわかる。

4-2. C ハウスの概要と活動状況

1) 古民家を再生した多機能複合型事業所

C ハウスは築 150 年の元庄屋屋敷を改修し 2017 年に設立された。A 助産所の別館、イベント広場、シェアハウス、貸畑、ショップなど多機能複合型の事業所で、運営形態は自主運営に該当する。A 助産師とともに設立に関わった 3 名の女性との共同運営体制が現在まで続いている。代表者は A 助産師でプロデューサーと呼ばれている。B は管理人と呼ばれ、イベント企画、屋内や庭のレンタルサービス、広報を担当し、実際家族で居住して建物管理をしている。残り 2 名は建物内でショップを運営している。これら 3 名は個人事業主として A 助産師にテナント料を支払い、それぞれのビジネスで収益を得ている。C ハウスには庭部（にわぶ）と呼ばれる近隣の 60 歳代の人々で組織されたチームがあり、庭・畑を手入れし家庭菜園を楽しむ。長らく空き家であった古民家に人が入ることで防犯になり、日本家屋を残すことで地面の保水力が高まり防災に繋がるなど、C ハウス

表1 Cハウスの概要

設立年	2017年(平成29年)3月
建物の特徴	旧村地区の空き家となっていた築150年の古民家を改修。敷地300坪で母屋と庭・畑がある
コンセプト	女性が野生に目覚める家。いのちがよろこぶ衣食住の営みと学び。
代表者	A助産師(プロデューサー)
共同設立者	育児サークル時代から関わっていた女性3名(うち2名はA助産所出産者)
運営形態	自主運営
事業内容/運営者	A助産所の各種健康教室・講座/A助産師「病院でお産するママのためのもうひとつの妊婦健診」
	Cハウス管理人(シェアハウス, レンタルスペース, イベント企画, 貸農園, SNS発信)/B
	ショップ1(フェアトレード, 自然食)ショップ2(雑貨, カフェ)/共同運営者
	産前産後子育て訪問サポート「つなぐ」/元Cハウスの参加者
	2021年秋オープン予定 助産院が作る保健室みたいな古民家カフェ(構想)

(筆者作成)

は地域社会にとっても公益的な役割を果たしている。

2) SNSで共感する者を引寄せる

Cハウスが公表しているコンセプトは、「女性が野生に目覚める家。いのちがよろこぶ衣食住の営みと学び」である。利用案内には、「Cハウスと思いが重なる方に発信の場として使ってほしい」というメッセージが記載されている。Cハウスで開催されるイベントは、定期的なマルシェ(手作り雑貨等の販売)、染物ワークショップ、ハーブコンサート、女性の健康に関する講座(メンタルヘルス、漢方)、子どもの古着マーケット、子どもとの手作り体験など多岐にわたるが、共通するものは自分らしいライフスタイルを大事にすることである。Cハウスのイベントの宣伝や発信はFacebookで行われ、共感や同質の価値観を抱く者が情報をキャッチして集まる。Cハウスでは資金調達法として積極的にクラウドファンディング(非投資型)を行っている。リターンにはCハウスの各講座の参加権や手作り雑貨等である。2021年の最大のプロジェクトは、母屋の倉庫を改修し「妊婦や子育て中の母親を一人にしない助産院が作る保健室みたいな古民家カフェ」を創ることである。これは教室やイベントに集まる勇気がない妊婦や母親向けの場として企画された。妊婦や母親を誰一人取り残したくないというA助産師の活動信念から生まれた。資金調達目標は200万円であったが開始後2日半で達成し、最終的には850人の支援者を得て600万

円の集金に成功した。2021年9月のオープンに向け工事が進められている。

このように、Cハウスの活動の発信にはSNSが大きな武器となっており、ネットコミュニティというべき集団に支えられていることがわかる。

3) 助産所の別館として「学ぶ」場の機能

A助産所の健康教室はCハウスで行われている。ベビーマッサージや産前産後の骨盤ケアの他、病院出産者を対象にした「もう一つの妊婦健診」というワークショップを開催している。これは助産所だからこそ得られる昔ながらの産婆の智慧や東洋医学的な見方、出産に向けた心身の整え方を学ぶことで、自身の身体や生活の仕方に気づきを促す場である。産後の母親も参加でき、予想しなかった帝王切開が受け入れられなかったとか、イメージとは違う出産体験にもやもやした気持ちを引きずっている母親が、自分の感情や思いを吐き出せる場となっている。

4-3. 母親同士の互助から新たなネットワークへ

1) 助産師が繋ぐことで生まれたネットワーク

Cハウスに集う母親にはシングルマザーもいる。A助産師はA助産所で出産したシングルマザーをCハウスに誘い、意識的にシングルマザー同士を繋ぐようにしている。そうして出会ったシングルマザー達は家事育児において助け合い、心情的な繋がりができていく。

A 助産師：開業助産師はその人の内情をわかっているので引き合わせやすい。この人、シングルで大変なので手伝ってあげてほしい、って呼びかけるんです。そうしたらすぐ何人か手を挙げて、その家に皆で行って、ご飯を作り子守りをしている間に母親をゆっくり一人で入浴させてあげる。暫く入浴できていなかった母親は本当に感謝する。同じ境遇を経てきたからこそ手伝ってほしいことがわかる。Cハウスに来たらしんどいことも言いやすい。オープンにできる。(中略)私が助産所の中だけにいたら母親の繋がりはできてなかったと思う。助産所の外に出ることで広がった。

A 助産師の発言は、開業助産師は助産所の外に出ることで母親のネットワーク作りのきっかけに大きく関与できることを示している。

2) 新たなネットワークと母親の起業への発展

Cハウスに集う母親たちの中から自主的に生まれた事業が、産前産後子育て訪問サポート「つなぐ」である。利用できるのは産前（つわりや切迫時など）、産後の母親限定で、利用者の家庭に訪問し3時間1万円の利用料金で総菜を15品作るという調理サービスである。これはCハウスに集う母親が家事を助け合うことから始まった。

A 助産師：家事を手伝って感謝されると、こんな自分でも人の役に立てたって皆喜んで帰ってくるんです。子育て中の母親は守られる立場になりがちで、社会の役に立たないと自分で思い込んでいく。でも自分にできることで人の役に立てる、それでお金が稼げるとわかると、母親のモチベーションが凄く上がる。かつてはバリバリ働いていた人が多いので、役に立てるという意識が自分を癒しているようだ。

このように母親たちが事業化した背景は、ビジネスとしての可能性以外に、社会参加することで自身も元気づけられるという理由があった。「つなぐ」以外に母親たちから生まれたものとして、森のようちえん¹⁾活動がある。行政に交渉を続け、2020年から認可外保育施設となっている。A助産師はCハウスが生み出しているものは、母親の潜在能力の開花であると述べている。

5. 考 察

5-1. ソーシャル・キャピタル醸成について

1) 助産所が関わることによる信頼について

竹原（2008）や日隈（2000）は、女性が助産所出産で得る豊かな体験は開業助産師との関係性から生まれると報告している。Cハウスに集う母親はA助産所出産者が中心となっており、これらの者とA助産師には強い信頼関係があると思われる。また、産後に同じ境遇の母親同士引き合わせるといったA助産師の関わりは、Cハウスに集う母親に、寄り添ってくれているという安心をもたらしている。CハウスはA助産所の別館機能を持つため、妊娠出産に関する健康教育の場であり母子の健全育成の場ともなっている。その活動は公益性、健全性の高いものである。母親たちがCハウスに抱く基本的な信頼感は社会的信頼ともいえるものであり、助産師が運営していることに関係があると考ええる。

2) 共感・互助の関係から互酬性あるネットワークへ発展

Cハウスに集う妊婦や母親はそこで開催されるイベントや集う人々に共感し同質の価値観を共有していた。それは妊娠・出産を含めて自分らしいライフスタイルを大事にしたいという思いである。Cハウスに来ることで助産所ならではの情報が入手でき、病院のケアと別の考え方に触れられる。また妊婦から子育て中の母親が集まることで世代間交流の場になっている。これらの体験が集う人々にとって価値あるものになっていると考える。Cハウスの主要な発信ツールであるSNSは共有することで拡がる性質をもつため、Cハウスの存在を知らない人たちにも伝播できる。クラウドファンディングで予想以上の支援が得られたのは、母親が駆け込めるまちの保健室のようなカフェという構想に理解・共感を示す人々が潜在的にいて、それが1つのネットワークを形成したということである。そしてこのネットワークは資金援助という形でCハウスを支援し、互酬性の関係が築かれている。

次に、Cハウスに集う母親には母親同士の育児家事助け合いという互助の関係が認められ

た。産前産後子育て訪問サポート「つなぐ」はそれが発展したビジネスであるが、子育て中の母親は社会貢献しているという他者評価が大きなモチベーションとなり、起業意欲にまで繋がっていることが認められた。母親は労働力を提供する一方で、収益と社会参加という満足感を得ており、ここにも互酬性の関係が築かれていた。

以上からCハウスの活動が生み出すものは信頼、互酬性、ネットワークの概念で説明できるものであり、ソーシャル・キャピタルが醸成されていると結論づけることができる。産前産後子育て訪問サポート「つなぐ」の発展過程を見ると、当初は母親たちの互助の関係であったものが外部に母親を巻き込むように展開しているため、結束型のソーシャル・キャピタルから橋渡し型のソーシャル・キャピタルとなっていることがわかる。

5-2. ソーシャル・キャピタル醸成における助産師の役割

Cハウスに参集する妊婦や母親はCハウスの活動コンセプトに共感して集まるが、互助やネットワークという関係に発展する過程においてA助産師の関与があった。それはA助産師が意図的に母親同士を繋ぐことである。母親の事情を理解しているA助産師が類似する境遇の母親に引き合わせることで、母親同士は仲間意識をもち互助の関係に発展していった。これは開業助産師と出産した母親の信頼関係が成立しているからこそスムーズにいくことである。杉山他(2018)は病院内の産後ケアセンターではソーシャル・キャピタルの醸成は難しいと報告しているが、病院組織の中では個人情報管理の観点からも母親同士を繋ぐことは課題が多い。ニーズのある母親には地域で活動している助産師を紹介する等の支援が望まれる。

6. 結 語

Cハウスの活動から生み出されているものはソーシャル・キャピタルと捉えることができ、本事例は開業助産師がソーシャル・キャピタル醸成に関わった一例と認めることができた。

研究の限界と今後の展望

本研究では運営側のA助産師とBへのインタビューに基づいて分析している。ソーシャル・キャピタルの状況は母親側にも調査することでより正しく捕捉できると思われる。また本研究は事例研究であり、本研究の結果がすべての開業助産師の活動に適合するものではない。今後はどのような要因があればソーシャル・キャピタル醸成が促進されるのか、病院の助産師活動に応用できるものはあるかについて研究を進めていきたい。

COI 申告

本研究において開示すべき利益相反事項はありません。

謝辞

本研究にご協力頂いたCハウスの皆様に深謝致します。また本稿の執筆にあたり二名の匿名レフェリーの先生方より有益なコメントを頂戴しました。ここに記して御礼申し上げます。

注

- 1) 乳児・幼少期の子どもに自然体験の機会を提供するため、主に森などの大自然の中で幼児教育を行う運動や団体。

文 献

- Geertz (1973). *The Interpretations of Cultures ; Selected Essay*, Basic Book (吉田禎吾・柳川敬一・中牧弘允・板橋作美訳『文化の解釈学』岩波現代選書, 1987).
- OECD (2001). *The Well-being of Nations —The Role of Human and Social Capital—*. (<https://www.oecd.org/site/worldforum/33703702.pdf>), Retrieved 2020. 8. 1.
- Putnam, Robert D. (with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti) (1993). *Making Democracy Work : Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, NJ : *Princeton University Press*. (河田潤一訳『哲学する民主主義—伝統と改革の市民的構造』NTT出版, 2001).
- イチロー・カワチ・高尾総司・S. V. スブラマニアン (2013)『ソーシャル・キャピタルと健康政策：地域で活用するために』日本評論社。
- 稲葉陽二 (2016)「ソーシャル・キャピタルの潜在力」『老年社会科学』37(4), pp 436~446。
- 川崎千恵 (2017)「乳幼児を育てる母親が認識する地域活動への参加によりもたらされたものと地域活動の特性」『日本公衆衛生看護学会誌』6(1), pp 19~27。
- 菊島勝也・福永瑞樹 (2018)「子育て支援グループ活動のソーシャル・キャピタルとしての機能—参加者と学

- 生スタッフの自由記述の分析－』『母性衛生』59(1), pp 154～161。
- 齋藤克子（2008）「ソーシャル・キャピタル論の一考察－子育て支援現場への活用を目指して－」『現代社会研究科論集』第2号, pp 71～82。
- 杉山彩子・小林圭子・飯田玲・廣瀬一浩・森山修一・徳永翠（2018）「院内産後ケアセンターの現状と課題 千葉西総合病院さくら産後ケアセンター2年間の経験から」『関東連合産科婦人科学会誌』55(1), pp 9～14。
- 須田敏子（2019）『マネジメント研究への招待』, 中央経済社。
- 竹原健二, 野口真貴子, 嶋根卓也, 三砂ちづる（2008）「助産所と産院における出産体験に関する量的研究－“豊かな出産体験”とはどういうものか？－」『母性衛生』49(2), pp.275～284。
- 内閣府国民生活局市民活動促進課（2003）『平成14年度
 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて』, 委託先：日本総合研究所。
- 日隈ふみ子・吉川哉子・武田陽・寺尾明子（2000）「助産院選択女性の出産体験の分析」『京都大学医療技術短期大学部紀要』20, pp.45-53。
- 福島富士子（2020）「個から家族, そして地域へ－優しさが循環する社会－」『東邦看護学会誌』48(1), p 15。
- 福島富士子（2013）「住民主体のソーシャル・キャピタル形成活動プロセスと支援体制に関する介入実証研究」『平成24年度厚生労働科学研究補助金（政策科学推進研究事業）平成24年度総括研究報告書』。
- 山岸俊男（1999）『安心社会から信頼社会へ－日本型システムの行方』中央公論社。
- 横山美江（2021）「子育て世代包括支援センターとネウボラのエッセンス」『小児保健研究』80(3), pp 364～367。